



©Studio Diva



## 第201回定期演奏会 ～冬～

2024年1月19日(金) 18:00開場 18:45開演

三井住友海上しらかわホール

指揮/齊藤一郎(首席客演指揮者) クラリネット/箱崎由衣\*

ホルスト:冬の牧歌

ブラームス(ルチアーノ・ベリオ編曲):

クラリネットソナタ第1番へ短調Op.120-1(管弦楽版)\*

ブラームス:交響曲第4番ホ短調Op.98

200回目のめでたい定期演奏会に満場のお客様をお迎えした本日は、マエストロ角田とセントラル愛知交響楽団の明るい未来も響いているはず。そして次回・第201回定期(年明けの1月19日)では、これまた意欲的なプログラムをお楽しみいただけます。

シーズンを通して取り上げている、ブラームスの交響曲・協奏曲——今回は晩年の傑作・交響曲第4番にあわせて、クラリネット・ソナタ第1番へ短調の管弦楽版(!)という珍しいアレンジの登場です。独奏を務めるのは、我らがセントラル愛知交響楽団の誇る第1クラリネット奏者・箱崎由衣。ブラームスの生地ハンブルクに留学して研鑽を積んだ経験もある彼女が、ブラームス晩年の境地をどのように歌い響かせるか……必聴です。

さらに併せて、英国の作曲家ホルストが若き日に書いた《冬の牧歌》(不思議なほどブラームスに合うのです!)と、このユニークな選曲を指揮するのは、おなじみのマエストロ齊藤一郎。2009年から2014年までセントラル愛知響の常任指揮者として大活躍、古典から新作に至るまで豊かで挑戦的なレパートリーを指揮して楽団の視野と可能性を拡大してみせた功労者です。2014年からも首席客演指揮者として楽団と密接な関係が続けているマエストロ齊藤、その覇気と練達の指揮が引き出す熱い深みは、今回も期待大です。

### ◆ため息の昇華、バッハへのまなざし……ブラームス晩年の傑作〈交響曲第4番〉

ドイツの大家ヨハネス・ブラームス(1833~1897)が生まれたのは、かの巨匠ベートーヴェンが亡くなってから6年後。そしてブラームスが亡くなった頃には、既に蓄音機も発明され(ブラームスの弾くピアノ録音もぎりぎりで見られています)、20世紀はもうすぐそこでした。

その長い創作活動を通して、ブラームスは常にその新作が目される大きな存在であり続けましたが、音楽の最先端を切り拓いていった……というわけではありません。バッハをはじめ古典の熱心な研究を続け、その創作に深く反映させてもいったブラームスは、〈自身の〉音楽をじっくり頑固に磨き続けた作曲家でした。

とりわけ、晩年のブラームスは、同時代にそと背中を向けるように、深くも美しい深みをもった音世界を広げていました。次回定期でお聴きいただく〈交響曲 第4番 短調〉作品98(1885年初演)は、その最高峰を極めた傑作です。

ため息が昇華されたような冒頭の美しいテーマに、対照をなす律動的な動機もあらわれ、密度の濃い展開が聴き手をずっと呑み込んでゆく……第1楽章からして、哀しい色にもエネルギーが強く宿る、晩年のブラームスならではの境地。古典とロマンのないまぜとなったようなその音楽には、途方もなく精緻な作曲技法がこらされています。

ブラームスがかねがね研究を重ねていたバッハ、あるいは中世・バロックの教会音楽からの影響も聴きとることができますが、決して〈古い〉音楽にはならないところがブラームスの凄さ。特に終楽章など、バッハに基づく主題からひきだされるパッサカリヤ(古い変奏形式)で書かれていますが、その30の変奏にソナタ形式の骨格が仕込まれており、壮大な宇宙へひらかれてゆく……というあたり、もう感嘆するほかありません。

この〈交響曲 第4番〉、セントラル愛知響の定期演奏会では、マエストロ角田の指揮した第182回定期(2021年5月)でもお聴きいただいたこと、ご記憶のかたも多いと思います(この時も、バッハ/ヴェーベルン《6声のリチェルカール》にヴィラ=ロボス《ブラジル風バッハ第2番》との組み合わせ、という優れて粋なプログラムでした)。月日を重ねブラームスに集中する今シーズン、この曲をふたたび、新しい体験として聴き直していただく意義も大きいものです。

### ◆〈クラリネット・ソナタ〉がコンチェルトに!——彩りを広げた新世界へ

その〈交響曲 第4番〉にあわせて、ブラームスのコンチェルトでも異色の存在——というより、作曲家自身は想像もしなかった〈クラリネット・ソナタ 第1番 へ短調〉の管弦楽編曲版をお聴きいただけます。

晩年の作曲家が偏愛した楽器・クラリネットの魅力を深く追求した〈クラリネット・ソナタ 第1番 へ短調〉作品120-1(1894年)

は、まさに〈交響曲第4番〉とも通ずるような傑作です。変奏技法や巧みで対位法的な展開など精緻な作曲技法が深く織り込まれ、しかし洗面をつくらず聴き手にずっと染みてゆく……という練達の極み。

さらに細かいことを言えば、〈交響曲第4番〉の冒頭で聴こえる、ため息のようなメロディ——これは、3度音程で下行（ホ短調でソ→ミ）で始まり、8小節にわたって3度音程だけが連鎖してゆく、という仕掛けになっているのですが、実は〈クラリネット・ソナタ 第1番〉の冒頭主題も、同じ〈3度音程下行の連鎖〉でつくられているという共通点がある。掘り下げてゆくと驚きの尽きない本作に関しては、クリスティアン・マルティン・シュミット／江口直光訳『ブラームスとその時代』〔西村書店、2017年〕の分析も面白いのでご参照を。

さて、この〈クラリネット・ソナタ 第1番〉は、クラリネット（またはヴィオラ）とピアノのための二重奏曲ですが、初演から82年経って、これをクラリネット独奏とオーケストラ用に編曲する、という大胆不敵な挑戦が話題となりました。

イタリアを代表する現代作曲家ルチアーノ・ベリオ（1925～2003）は、20世紀の前衛的な技法を次々に取り入れて、独奏楽器のための《セクエンツァ》シリーズなど、刺激的な傑作を数々書いたひとです。

代表作のひとつ《シンフォニア》では、マーラーやブラームス、ドビュッシーやベートーヴェン……と過去の多種多様な作品からの無数の断片をコラージュしてみせたのをはじめ、ベリオは自作以外の様々な曲や素材を、編曲の域を超えて〈料理〉するのが得意でした。

世界各地の民謡を、小編成アンサンブルの多彩と共に再創造した《フォークソングス》（とても素敵で心おどる名作です!）をはじめ、ポッケリーニから編曲した《マドリードの夜警隊の行進》では、作曲家が同じ変奏曲に遺した4つのヴァージョンを、4つ重ねて同時に演奏させるという着想（微妙に味の異なる生地を重ねたミルフィーユのよう!）で聴き手を驚かせ、《レングリング》ではシューベルトが交響曲のために遺した断片をベースに、欠けたところはベリオ自身の語法による音楽で埋める（継いだ箇所不意に異世界に飛ばされるという奇抜な〈補作〉です）……と、なにしろ多彩な料理人でした。

そのベリオがブラームスを編曲するからには、どんな驚きが……と思いきや、今回お聴きいただく編曲は、古典的なオーケストラ編成を遵守しつつ、ピアノ・パートを彩り豊かに拡張した（割に）真っ直ぐなアレンジなので、初めてお聴きになるかたにも楽しく聴けるはず。

ただし、交響的なサウンドに置き換えるにあたってバランスを考えたのか、第1楽章と第2楽章の冒頭に新しい序奏を付け加えているのは、原曲を知る人を仰天させる措置として、発表当時に話題を呼びました。あのピアノ・パートがこんなサウンドに生まれ変わるのか!と感心したりつつこみを入れたり、ともあれお楽しみいただければと。

## ◆ホルスト若き日の秘曲《冬の牧歌》日本初演!

この2作に先立って最初にお聴きいただくのが、イギリスの作曲家グスターヴ・ホルスト（1874～1934）の《冬の牧歌》というのも、ブラームス晩年の渋い傑作を並べた冬の定期演奏会ならではの選曲と言えましょうか。

のちに大オーケストラのための組曲《惑星》で大評判をとるホルストですが、この《冬の牧歌》は、まだ王立音楽院で学んでいた1897年に、最初のオーケストラ曲として書かれた作品。一貫して6拍子で流れるなかに、息長く詩情美しいメロディと悲劇的な打撃の起伏が巧みに織り込まれた佳曲ですが、書かれるまでの経緯やタイトルの由来など資料が残されていません（それどころか、1984年に初演されるまで埋もれていました）。とても牧歌らしからぬこの曲調でなぜ《冬の牧歌》なのか、タイトルには文学的なベースがあったのか……想像するより他にありません。

若きホルストが意識していたグリーグ、なにより師のスタンフォードからの影響も強い作品ですが、彼らにとっての偉大な先人ブラームスと並べて聴く相性は意外に良い曲ですからお楽しみに。ちなみに、楽譜出版社の情報によれば今回の演奏が日本初演となります。記念すべき瞬間を、ぜひホールで一緒に!

やまの たけひろ  
山野雄大

ライター〔音楽・舞踊評論〕。『レコード芸術』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ・テレビ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CDライナーノートや企画構成、オーケストラやバレエ公演の解説など多数。

Profile

